

## 7 日中の狭間で生きる

### —英子（仮名）のライフストーリー—

聞き書き：資料収集調査員 趙 彦民

#### 英子（えいこ）の略歴

|                    |   |
|--------------------|---|
| 大正 12(1923)年 8月 1日 | 長野県松本市 <small>まつもと</small> に生まれる  |
| 昭和 19(1944)年       | 満鉄の電話交換手として、1人で渡満<br>吉林省吉林市 <small>きつりん</small> の満鉄支社に配属<br>敗戦後、吉林省吉林市に在住 |
| 昭和 59(1984)年       | 日本に永住帰国   |
| 1977年から1978年の2年間   | 日本に一時帰国   |
| 現在                 | 長野県に在住  |

#### はじめに

英子（仮名）は昭和 19(1944)年に満鉄の電話交換手として、単身で渡満。吉林省吉林市の満鉄支社に配属された。終戦後、避難生活の中で中国人と結婚して、昭和 59(1984)年日本に永住帰国するまで中国の吉林市で生活を送っていた。1972年に日中国交が回復し、その5年後に日本へ一時帰国することを果たした。現在長男一家と長野県塩尻市に在住している。

### 1. 渡満前の生活

#### 農家の総領として

英子は大正 12(1923)年 8月 1日、長野県松本市に、7人兄弟の次女として生まれた。父親はわずかな土地で農業に従事し、農閑期には山での伐採仕事などで得られた現金によって、なんとか生活を成り立たせていた。母親は洋服を仕立てたり、着物を縫ったりすることで、家計の足しにしていた。兄弟は7人だったが、姉は9歳の時、盲腸炎で亡くなった。英子は総領として、家事の手伝いをしながら、小学校に通った。子供の頃の情景について、英子は次のように語る。

兄弟は6人おりました。みんな2つずつ違うから、私のが弟、2つ下、その下も2つ、皆は2つ違う。弟2人、妹2人、父、母と（徴兵されている兄の）8人家族。姉さんは小さい時、盲腸炎、病院も行かなかった、お金がないから、9歳でなくなった。だから、（私は）ご飯を作って、仕事、子守り、あまり勉強していなかった、苦労したのね。貧しい家に生まれ

たから、遊び時間がなく、時間があれば、他人のうちのお子守りしなければならない、お金を稼ぐ。子供の頃は苦しく、今は幸せだよ。子供の頃、お金を見たことがない。当時は、お菓子などあまり食べたことがない。普段はほとんど食べたことがない、正月の時（お菓子を）少し買って。子供の頃は苦しいけど、日本に帰ってきたときは良くなったよ。貧しい人がすくなくなっている、昔よりいい生活ができた。

英子の家は耕地面積が少なく、自作で得られた食糧では一家は生活できなかった。土地を借りて、やった生活を凌ぐ。英子の記憶のなかには少女時代での食生活が鮮明に残っている。

土地は持っていたのもあるし、借りたのもある。畑では麦を作ったね、あわ、野菜とか。それで、自分（たち）で食べる。また、（土地を）借りているものだから、（小作料を）人にやらなきゃいけないでね。作っても、お米ぐらいだったのか。残るのは少ない、だから、1年（の食べ物）足りないから、その、ほら、麦、あわとか、麦は粉にして、混ぜて食べる。それから、働いて買わなくちゃいけない。冬（農作業）ができないからね、私の父は山に木を切りに行き働いている。母親は仕立て、着物、ああいう仕事をしていたの。それで、働いて稼ぎ、お米を買ったでしょう。私たちは学校に行き帰ってきたら、もう仕事。貧しい家に生まれて、それで、総領のしたに2人ずつの妹と弟がいるから。兄は徴兵されたし、（私は）総領です。

### **家の手伝いに追われて**

8歳の頃、英子は家の近くにある小学校に入学した。兄弟が多いため、ほとんどの時間を家の手伝いに費やした。小学生として学校生活の楽しさを味わうこともなく、働いてばかりという印象が強く残っている。

小学校の頃の生活は楽しくないさあ、働くばかりなもの。学校に行くのは楽しいですよ。よかったけど、お弁当を持っていく、梅干1つ、おかずがないの。お弁当の中に梅干を入れる、あわご飯と。

8歳のとき、小学校に入って、私のうちは遠い、1時間ぐらい歩く。あの頃、貧乏で子供が多くて。小学校時代は、毎日帰ってくるのは、仕事でしょう、（近所の漬物）工場で私たちも働くんですよ。それで、お子守りをしたり。それで、一番辛かったね。私は総領だから、姉がいないから、家事のこと全部、私。子守りから、妹と弟と他所の子供。他所の子供をおんぶして、金持ちの家の子守り、同じ村のねえ、お金持ちの人達の。

勉強したのは、3、4年。まあ、（学校に）出たり、出なんだり。意味が分からなかったね、勉強があまり分からなかった。14歳までは学校だけど、それで、6年は出てない。だいたい

4年ぐらいしか出てない。ずっと休んで、お子守りした。小学校を卒業してから家事の仕事2年ばかりやって、ほんで製糸工場にいて2年ぐらい。それで帰ってきてまた家の仕事、満洲へ行くまでね。

## 製糸工場へ

日清・日露戦争以後、長野県において養蚕業、製糸業は盛んになってきていた。特に機械の投入、経営規模の拡大により、大規模の機械製糸工場が諏訪地域、上高井郡に見られるようになった。このような背景で、英子は16歳になった頃、家から離れて岡谷市にある製糸工場へ働きに出た。その時の経緯と製糸工場で働いた体験について、英子はつぎのように語っている。

本当は、兄はあの・満洲に兵隊に行っていたし、弟も兵隊に行っちゃったし。ただ、母、父と貧しい生活していたでしょう、私の下に4人いたからね、弟と妹が。農家で学校には一応行っていましたが、私は総領でもっていろいろやらなくていけないもんで、子守りとかね、だって、6年学校出てないですけど、卒業だけはしました。

卒業したらね、全部（製糸工場に）行かなくちゃ、いけないもんで。みんな（両親に）「行け、行け」って言われた。友達と一緒に岡谷の製糸工場へ、それで、製糸課に1年・2年ばかり工場だね。あの、生の、ねえ、製糸課って、糸の工場、製糸課ってわかるかねえ。製糸工場だね、住み込みで10人ぐらい、一つ部屋。朝ご飯はあの頃おかずすこしがあったけど、いなご、お味噌汁、割飯、白いお米じゃなくて。割飯って、麦ね、潰して、ああいうご飯朝から晩まで。仕事は8時頃からだと思うけど、5時頃まで、お昼に食事だから、休憩時間がない。正月とか、お盆くらい、1年は2回くらい家に帰る。

その工場に2年ばかり居たけど、体が続かないんで、給料も安いし、食べ物もあわない、（家には）何にもないけど、あん。・・・それなんもんで、製糸工場から帰ってきて、少し家に居て、漬物工場に勤めていた。それで、20の歳もきたからね、満洲の募集に、市の募集にね、松本市から行ったんです。

## 満洲へ

英子は満洲に渡る前、女工や漬物工場などいくつかの仕事を体験した。だから、彼女は会社員や事務員という仕事に憧れていた。しかし、英子自身の仕事の経験から、英子は戦前の日本社会では女子が社会に進出するのは難しかったと思っていた。そこで、英子は自分の希望をかなえるため、満洲に行くことを考え出した。憧れの仕事につきたいという気持ちが渡満の決定的な要因となっていた。また、当時長野県は満洲への移住動員や移民の普及活動に力を注いでいたため、各種の宣伝活動が盛んに行われていた。英子の満洲行きの気持ちはますます強まっていた。

私は希望があって、やはり会社員とか、事務員とかね、そういうところで働いてみたいなあ。日本で使ってくれないから、日本じゃ、女の子を使わないんですよ。だから、そういうところで働いてみたいと思って、それで（満洲に）行ったんです。日本じゃとてもじゃないけど、私の学問じゃ、仕事なんか見つからないね。学問なきやあ、子供のお子守りとか、ああいうことしかやってないから。漬物の工場で働いてね、ほかに仕事がないから。それで希望で行ったんです。ほんで、2、3年で帰ってくるように言われて、（しかし）2、3年にならないうちに負けちゃったからねえ。

市の職員から満洲に関する説明を受けた英子は、満洲行きへと気持ちが動かされたようである。

それは、あの、なんだ、そこを紹介されたときいいといわれていた。あっちは食べ物もいいし、給料もいいし、ほんで3年で帰ってくる。申し込んだらね、許可が下りて、それで、簡単に行けました。

### 渡満前の生活

英子が渡満してから、再び故郷の地を踏んだのは33年後のことであった。彼女の記憶のなかには少女時代に過ごした日本の正月が忘れられることなく、正月を迎えるのが何より嬉しかったという。少女時代の思いを、英子は次のように振り返る。

お正月とか、お盆に、1銭も、1銭ね、昔の1銭をもらうのは嬉しかったね。まあ、それは忘れたことがないわ、ただの1銭だね、飴玉5つぐらい買えた。あと嬉しいことは何だろう、皆で遊ぶこととか。ほかには、果物は買わないんで、一切買わないからね、果物は全部家で作るから、食べたきゃあ、とって食べたり、友達と山に登ったり、まあ、そのぐらいのことですね。

また、思い出すことはね、まあの、思い出すことってやあ、映画が、たまに松本までね、1年2回ぐらい（見にいった）。それが電車にも乗れないし、車もないし、歩いて行ったり、遠いですよね。そういうのは楽しかったです。それから楽しいことは何だろうね、まあ、私たちの小さい頃は、働きだから、遊ぶことって、ということはあまりないですよ。田植えをやったり、いなごとったり、いなごって知っています？<筆者：あの、虫ですか？>虫ね、あれを取って、親にやったり、薪、あの、ごみをさらったりね、火を炊くでしょう、昔ね、そういう、ああいうものを拾いにいくんですよ。そういうことをばかりして、楽しいことがないんですよ。

貧しい農家に生まれた英子は家計を助けるため、毎日勤勉に働いていた。その思いを次のように回想している。

まあ、悲しいことばかりだね。働くことばかりだもん、ね。学校から帰ってきて、大根の毛取り、しかも、(家の)前にあるもんで、工場が。そこに行って、そういう仕事ばかりしていたんですよ、小さい時からね。それで、他所の金持ちのうちのお子守り、おんぶするんですよ、小さい時からね、学校から帰ってきて。それでいくらもらったか、そのお金が分からないの、親に入っちゃうもんで。そういう生活して、卒業したんです。

## 2. 満洲での生活

20歳の頃、英子は満洲に渡った。まず、<sup>しものせき</sup>下関から朝鮮に渡り、満洲の<sup>ほうてん</sup>奉天(現在の<sup>しんよう</sup>瀋陽)に着いた。そこでそれぞれの地域にみんな分かれた。彼女は、吉林省吉林市の満鉄の会社員として働くことになった。満鉄の電話交換手として、電話を取ったり、つなげたりするという仕事をしていた。

### 満鉄の電話交換手として

英子は吉林省の満鉄に着いたあと、1部屋6人収容の寮に入った。希望に満ちた満洲での新しい生活が始まった。最初は、中国語が話せないため、町に出かけることがほとんどなかった。そして、職場では中国語を要求されるため、1日の仕事を終えてから中国語の勉強をしていたという。そのときの経緯を、英子は次のように語る。

仕事はね、夜勤もあったし、交替だね、7時間だったなあ、長かったね、夜の人は夜(に仕事をやる)。仕事は、中国語の先生がいて、夜勤でもって中国語を教えてもらって、それで、あの、電話に出たり、いろいろやっていたんです。そこで、(中国語を)覚えたんです。私は、あの、中国語ね、あまりたくさんは覚えられないけど、小学生程度でもないけど、そのぐらいものを教えていただいたんですよ、無料でね。でも、仕事ができないからね、むこうは中国の人きりだから、電話が来る時には、中国の人だったら、中国語で喋らなきゃいけないもんで、そういう勉強をしたんですよ。

英子は終戦の直前に満洲に渡った。その時、戦況が悪くなってきたことにより、内地では食糧などが不足していたと思われる。満洲に渡る前に「満洲の食べ物はいい」と言われたが、満鉄の寮での生活では、それほど満足できるような食事ではなかった。そこでの食べ物について、英子はこう語る。

主食はお米じゃない。何を食べただろう、おかずあまりないわ。〈筆者：肉はありましたか?〉やあ、あまりないね、ない、ない。野菜とかね、ああいうものしかない、魚がすこしあったね。

### 満鉄での中国人との仲

英子の会社は日本人だけではなく、そこでは中国人も働いていた。英子は同じ会社

に働く人であれば、日本人であろうが、中国人であろうが、皆が同じだと思っていた。中国語はあまり話せなかったが、日常生活のなかでは、できる限り挨拶していたようである。同じ職場の中国人との関係について、英子は次のように回想している。

（中国人は）あまりたくさんいないし、女の子が居たけど、あまり話ができないし、ね。私たちが日本語しか分からないし、ただ、挨拶するぐらいで、いじめようとか、見て、嫌だなあとか、そんなことはなかった。

私たちが、下の働く人がそういう事はないと思うけどね。上の人とか知らないけど、私たちが貧乏人だから、そういうところから働きにきたから、同じだと思っていたからね、そういう差別がないと思う。だから、お互いに教えてやったり、中国語を教えてもらったり、日本語を教えたり、仲良くしていたね。（差別とか）そういうことがなかったと思いますけど。上の人がどう思ったか、ね。中国人とのいい関係を持っていました。電話に出るとき面白半分。私たちは、助役じゃないから、同じ身分と思ってね、（仲が）良かったと思いますね。

終戦までの間、英子は、やっと自分の希望を実現できて、仕事も楽しいと感じていた。会社でたくさんの友達ができ、満洲の生活に馴染んでいたようである。しかし、慣れ始めた頃に戦争が終わり、英子の希望は終戦と共に失われた。終戦前後の情景を、英子は次のように振り返る。

そのときはまだ帰りたくないね。＜筆者：楽しかったですか？＞そう、そう、みんな、ほら、友達もいたから。一緒に行った人も一緒だったし、寮に居りゃ、みんなほら、日本人。だって、中国の人もいたけど、寮にいないから、皆すこしずつ話ができる。

（戦争に）負けてからだめだったね。負けて1ヶ月以上だね、そこで働いていて。それで、1ヶ月後に全部日本人は日本へ、私は後藤さんのうちに行った。今、その後藤さんの家は、埼玉だか、静岡だか、覚えていないんですよ。亡くなっているか、（生きて）いるのか。あの頃私ができる時に聞かなかったものでね、住所。ほんでそこに引取られて、養ってもらって。

### 3. 避難生活

#### 後藤さんの家へ

終戦のあと、英子は一時的に満鉄社員の後藤さんのうちに引き取られ、保護された。その家で2、3ヶ月を過ごすことができた。そのときのいきさつを、英子は次のように話してくれた。

うん、敗戦時点でね、会社で話してね、まあ、半月あとで知らせたのかなあ。それまで、あ

の、そこに働かないと、あと継ぐ人が居ないから。1ヶ月だったかね、みんな残されて、そこで、やっていたから。慣れたと思ったら、もうみんな引き揚げた。

その後の生活は私はね、みんなのような苦勞していないんです。満鉄が潰れちゃって、その満鉄の助役の人があなたはあそこへ行け(と言われて)、世話になったわけ。そうじゃなきゃ、いくところがないし、知らない人だし。だから、満鉄の社員でもある後藤さんという人の家にお世話になって、その人が引受人になって、そこで寝泊りしたのです。夫婦は子供いなくて、みんな、こういうね、(私のような)娘とか、責任をもって、あの、日本に帰るように(した)。ただし、私は帰れなかったからね、その人は帰っちゃった、日本に。

終戦で混乱する社会のなか、英子は後藤さんの家にあまり長く世話になることに気兼ねして、後藤さんの家を出た。

### 朝鮮人の病院の看護婦として

その後、英子は友達の見習いにより、国民党の統制下にある朝鮮人が開いた病院に入り、看護婦として、働かせてもらった。英子は病院で一生懸命働いて、お金を貯めて、日本に帰ろうと思っていたが、給料を盗まれてしまい、それが英子にとって運命のいたずらとなった。そのうえ、共産党が吉林に入城し、院長は行方不明となり、英子たちは居場所を失った。英子はそのときの経緯を、次のように振り返っている。

友達が世話してくれて、朝鮮人の病院に働きに入った。朝鮮病院は、院長っていうのは、自分でやっているね。院長は朝鮮の人でね、奥さんは日本人。そこで働かせてもらって、(友達と)2人で行ったの、2人で部屋を借りて、ほんで下宿して、そこで食べて。ご飯よく食べさせてくれてねえ、良かった。

その病院で看護婦の見習い、薬を包んだり、お掃除したり、ほんで、患者の名前を呼んだり。(当時)伝染病も多かったから、皆伝染病、男も女もね。怖かった、伝染病っていう病気じゃない、男性のおしっこするほうね、あの時は流行った。何ってたっけなあ、あの病気は。そこで、見習看護婦として、あまり頭がよくないけど、そこで働いて。で、何年、何年働いたかね。あの、私たちその、書かなくてもいいけど、給料はね、泊まっていた(ところで)盗まれちゃって、ほんで日本に帰ってこられなかったですよ。私と2人で、もう1人の人がいたけど、もう1人の人は、あの……。2人とも皆とられちゃったんですよ。それだもんで、日本に帰って来られないで。

この病院に入って、2、3年かなあ。ほら、共産党がきて、その時にあの、あれをしたんですよ。院長も縛られちゃってね、行先が分からないけど、死んだか、(生きて)いたか、ちっとも分かってない。

## 主人との出会い

昭和 22 年の頃、英子の世話をしてくれた朝鮮病院の院長が捕まえられて、病院での仕事ができなくなった。しかも、英子は病気にかかり、動けなくなってしまった。そんな困っていた時に、以前一緒に満鉄で働いていた中国人に出あい、彼と結婚することになった。

英子は結婚の経緯について、次のように語る。

その頃、私も病気になって、伝染病に移っちゃって、働けなくなって、困っている時に、この満鉄で一緒に働いた人（中国人）にね、救い上げて、ほんで助けてもらって。その人は、奥さんはいない。だもんで、それで、中国の人、あの人（息子）のお父さんと一緒になったわけです、結婚したのね。（昭和）21 年、22 年頃かな、22 年だと思うけどなあ。あの時は、まあ、結婚式するどころじゃないから、市役所にも行かないし、公安局、あそこの手続きも何もしないで、一緒に住んじゃった。だから、結婚式もやらないし、何もない。

英子は、中国に残り中国人と結婚して生きる道を選択するか、あるいは死を選択するかという二者択一を迫られた。英子は生きて日本に帰りたいという気持ちから、中国人と結婚することを選択した。そのときの気持ちについて、英子はこう語る。

しょうがないね、よかったですよ。ははは……。でもそこで死んでしまえばね、帰ってこられないんだし、帰るにもお金がないし、帰れなかったし、途中でまたね、海に落とされるの、嫌だから。だから、もういいわと思って、結婚したのです。

自分の思いのなかでは、中国人と結婚したくないという気持ちだが、やあ……。それ、それはありましたね、少しは。やはり帰りたい一方で、だけど、身体がだめで、しょうがない、我慢して、そいで生活していたのです。それもよかったです。

昭和 23 年に長女、昭和 25 年に長男、昭和 28 年に次女が生まれ、子どもを 3 人もうけた。次女が 6 歳になると、英子は子供たちを保育園に預けて、縫製の工場に勤めることにした。

## 4. 中国社会での生活

中国社会に投げ出された英子はなかなか中国の生活に馴染めず、言葉の違いから生活習慣まで、いろいろと辛酸をなめていた。その生活の苦労を振り返って、英子は次のように語ってくれた。

まず、言葉がね、できないことが一番あれだったね、恥ずかしかった、辛かったですよ。中



国語が出来なくて、言うことも言えない、話したいことも話せなかったし。食べるものも、食べたことがないような食べ物で、その満洲渡った頃は、ほら、満鉄だからね、日本の料理を食べたけど。寒くてね、あそこは中国はね、日本では想像が出来ないほど寒くて。買い物に行ったときに、好きなものを買えなかった、むこうの言葉が分からなくて、お金の数も違うし、金額が分からないし。そういうところがちょっと苦労しましたね。それで、お風呂に入れなかったと、まだ、覚えているの、着るものだってね。

### 主人は優しかった

結婚後、英子のご主人は鉄道関係の仕事をしていた。生活は裕福ではなかったが、ご主人には優しくしてもらったという。英子は夫について、こう語る。

主人は、ああ、やさしい、やさしい、やさしすぎて、何でもできる。ご飯なんかみんな作ってくれたの。私は、中国の料理ができないから、(主人は、)退職してから全部うちの仕事してくれたんだ。私はぜんぜんやらなんたんだ、やっている間がないんだしね。会社で働いて、また残業に持ってきて、8～9時まで内職をやるから。鉄道ほら、腕に巻くでしょう、じゃないの、腕にね、これ(腕章)。私はそれを作る内職。だから、家事の仕事、皆旦那やっでいて、やさしかった、やさしすぎるんだ。ずっと満鉄だった。だから、(息子は)あと継いだから、お父さんのあと。そうじゃなきゃあ、そこへ入れないでね、日本人の子どもだから。

主人はね、あの(息子の)お父さんでしょう。やさしいし、言葉も日本語全部ができるね。満鉄にいると、日本語ができなきゃいけないで、そのもの日本語ができて、よかったですよ。1人の(夫の)妹は、ほら、産婆さんというの、先生じゃないけど。昔ほらねえ、(赤ん坊を)取り上げて。ほんで、その旦那が八路軍。そこへ娘は(養子に)やったのですよ。そこに幸せに暮らしていたんです。

### 縫製工場へ

英子は1番下の子供を保育園に預けてから、縫製工場へ働きに出た。工場では中国人との人間関係に恵まれたようであった。そのときの様子を、英子は次のように話してくれた。

洋服工場で、日本の子供の(ために)作る服ね、何というの? <筆者: トオンジョアンチャン 童装場> そこで16、17年くらい働いたんです。いま、そこで作られていないけど、その工場は、合弁しちゃったから。

<筆者: 職場の人間関係は?> いいですよ。私はね、本当にどこの会社へいっても、病院にいっても、その会社でも、みんなに可愛がってもらって、親切にしてくれてね。いまでも、いきたいぐらいです。私の工場の責任者ね、中国でというと「主任」というの、その人がいい人で、「一个姓李的人(李さんという方)」ね。うちの娘の婿の妹の息子と、この責任者

の娘と結婚したんですよ。だから、親戚になっているわけ。皆いい人なんですよ。私は、付き合い合っている人はね、その人いまでも会っているけど、話もしているけど。

## 大躍進、文化大革命の時代

1958～1961年、毛沢東もうたくとうの提唱で大躍進だいやくしんという人民公社の運動が始まった。しかし、大躍進運動は失敗をもって終わりを告げた。こうした政策の失敗により、食糧は激減し、深刻な大飢餓をもたらした。英子も例外ではなく、その運動に巻き込まれた1人であった。そのときの生活状況を、英子は次のように思い出している。

あの頃は、あまり覚えていないけど、何か拾って、食べていたみたいけど、何だろう。私は全然覚えてないだよ。娘はよく覚えているけどね、そういうことは全然覚えがないだ。58～59年の大躍進、(この運動のスローガンである) 深挖地シェヌワディ(土地を深く掘る)、大鍋飯ダグオファス(みんなは食堂で食べる)。61～62年一番苦しかった頃、落ちていた白菜の葉を拾って、食べていた。

1966年に入り、文化大革命ぶんか だいかくめいがはじまった。文革の当初は中央集団内部による権力の闘争だったが、末期になると、外国との関係をもっている人が闘争の対象となり、多くの日本人あるいは日本人の配偶者が糾弾されたり、非難された経験をもつ。しかし、英子の主人は人柄が良く、また、農民階級の出身ということが幸いして、あまり影響を受けなかったという。

文化大革命の時は大丈夫でしたね、縛られなかったからね。普通は捕まるでしょう、捕まらなかった。おとなしい、やさしい人だから。家は貧しかったから、貧乏人だね、お金持ちだったら、あれだけ。貧農だから、貧しい家、何も無い、まじめだしね、まっすぐ。だもんでよかったですよ。

英子は日本人として、中国社会で生きてきた。中国人あるいは中国社会に対する思いは次のようなものであった。

まあ、あの頃、何を言われたかな、まあ、中国のお金持ちのと日本人の人は差別があったね、中国の人もそうでしょう。金持ちの人と日本人はいろいろ言われました。そんな覚えていないけど。私は、個人としてはね、そんな辛いことがあまりなかった。だもんで、まわりの人はいいい人で、中国の人みんな、いまでも付き合い合っているけど。住んでいるところ(の知人)ね、私にくるようにくるように言って、あの、あれ(連絡)しているのですけど。ほんで、学校の、あのうちの子の学校の先生ね、中国の女の先生だけど、ほんで家にちょこちょこ送ってくれたね、まあの、よくしてくれた。親戚のように付き合い合ったんですよ。だから、まわりの人からね、子供はどうだったかね、いじめられたのか、いじめられないのか、それは私が聞いていないけど。大きな女の子(長女)はね、3歳の時、人にやっちゃったんですよ。

家の主人の妹に子供がいないもんで、ほんで、そこの家の子供と（して）育って、あの子は大学までいっているけど、こっちの2人はそういうことを聞いたことがないけどね。それでも、すこし、いじめられたじゃないですかね。（子供の）先生がいい方で学校も近いし、ちょこちょこ先生がきたり、話してくれたり、いい先生でしたからね。だから、人のような苦しみはなかったですよ。ただ、食べ物ね、日本と違って、でもいいですよ。あの、共産党になって（日中国交回復して）から、お米をもらって、ありがたく思ったのですよ。

あの頃、また配給制だったからね、いまと違って。食糧はね、私はあの日本人だもんで、27斤（1キロ＝2斤）ね、私は27斤お米、全部<sup>ダミ</sup>大米（お米）、あの人（主人）は1キロね、子供とかね。あと私は全部だもんねえ、私の米は皆で食べている。ははは・・・そういうところがよかったね。でも、あれ、なんだ、<sup>しょうかいせき</sup>蒋介石の時くれなかったけど、八路軍になったらくれただけだねえ、最初、くれなかったんですよ。いつあれなったか、わからないけど、でもよくみてくれたけどね。だって、給料だって、差別がなかったし、中国人と同じように給料をもらったし。会社だってね、責任者がみんなよかったもんで。

終戦後、英子が住んでいた吉林市にはたくさんの日本人が残っているようであった。ほかの日本人との交流について、英子はこう語る。

何人かいたのが、吉林。皆、今は帰ってきている。北海道とか、東京とか、山梨県、松本市（長野県）、けっこういましたよ。みんなで遊んだり、日本語で喋ったりする。たまたま会議があって、呼ばれて日本の人が話してくれて、市役所じゃないけど、あれ何というだろう？<筆者：政府>そう、あの吉林なら吉林のなかでね、そういう時があるでしょう、それで話してもらって、親切にしてもらったけど。1年2回会議があってね、内容はいろいろあったけどね、覚えてないかなあ。日本人を呼んでもらって、困ったことがあるかどうか。

英子にとって、中国社会で一番嫌な思い出は子供が就職の際などに差別されたことである。

今でも忘れられないのが、長男は学校出してから、<sup>シアシアンチンニエヌ</sup>下郷青年（農村に行って畑仕事をする）とって、田舎の地方へ働きに連れていかれて、中国の子はしばらくしたら家に帰ってこられるのに、日本人の子だからというだけで、長男はしばらく帰ってこられませんでした。また、次女は行きたい会社に入ることも出来なかったんですよ。この頃が私にとっては一番辛いことでした。

## 日中国交回復

1972年、日中国交が回復された。日本と中国の通信往来ができるようになった。英子は実家との連絡がとれたので、一時帰国ができたという。

だから、田中角榮<sup>たなかかくえい</sup>が中国に行って、その何年か、忘れたけどが、それまで手紙を出せないから、(連絡が) なかったです。だから、田中角榮が行って、話し合っ、その年から手紙ができるんです。前は出来なかった、何年か私は分からない、それからです。

そこで、田中角榮が来てから、私は日本に手紙を出して、そんであの手続きをとってもらって、ほうで、帰るようになったんです。それ(戸籍)がなくなっていたんです。死んだようになっていたんです。籍がなかったのです、死亡って書いて(あって)、籍がなくて。

昭和 52(1977)年、英子は日本に一時帰国するという多年の念願が叶った。

昭和 52(1977)年は良かったよ、私は日本に帰っていたから、里帰りに。この里帰りはよかった、その頃は。

## 5. 里帰り

### 昭和 52 年に一時帰国

1958 年最終の集団引揚げが終わったあと、1959 年に「未帰還者に関する特別措置法」が制定された。この「特別措置法」によって、多くの残留日本人が中国で生きているにもかかわらず、戸籍を抹消されたのである。英子も例外ではなく、戸籍を抹消された。そのときの経緯を、英子はこう語る。

里帰りの手続きは、日本だね、弟はやってくれたけど。ほんで、中国で、あの、何かね、公安局にね、帰ってもいいからって言って、昭和 47(1972)年に日本へ手紙を出して、手続きしてくれて。<筆者：すぐ見つかりましたか>うん、見つかった。弟の、ほんで、市役所に行ったら、戸籍に×、死亡となっていた。

英子の親族は英子の帰国を喜んでいた。英子は 33 年ぶりに両親、兄弟たちと再会することができ、嬉しくて胸がいっぱいになった。そして、同級生が同窓会を開いて、英子の帰国を歓迎したという。

よかったですよ。学校の同級会もあって、市でもって呼んでお祝いしてくれて。それで、あの働き先を見つけてくれて、って 2 年間旅館で働いて、そいで・・・私はね、帰ってきてここ(現住所の塩尻市<sup>しおじり</sup>)に住んでなかったけど、あの、崖<sup>がけ</sup>の湯<sup>ゆ</sup>のホテルで働いていた。旅館で松本の旅館、住み込みで。ホテルは、あの、古都<sup>こと</sup>って、ふるいみやこ、松本の・・・えっと、松原じゃない、あれなんのだろう、あとで聞いてあげる。そこでもって 2 年間で帰ったのですよ。

その時に、父と母は亡くなったのですよ。一時帰国で、あの、私の母が亡くなって、自分の

まえで。ほんで、私の帰った次の年、その次の年に父が亡くなって。兄も亡くなっていますけど、兄は、牡丹江<sup>ぼたんこう</sup>に行つて、戦争に負けて2年ぐらい経てから帰つてきて、胃がんで亡くなった、40 いくつで。ほんで、弟が2人、妹が2人、いまいる。5人兄弟。今は妹、2人の弟みんながよくしてくれてね。

## 6. 永住帰国

### 昭和 59(1984)年に永住帰国

1984年、英子は弟に身元引受人になってもらい、中国人の夫と共に日本に永住帰国した。帰国後、すでに61歳になっていた英子は自分の生活のため、そして子供たちの来日のための旅費と来日後の生活必需品を揃えるために、働きに出た。幸いなことに地元のホテルの臨時従業員として就職ができた。そのときの経緯を、英子は次のように語る。

(昭和)59年だけど、私はみんなにあれ(子どもたちの来日ための準備)をしていたから、私は働いてね、(お金を)貯めといて、ほんで、あの、あれ(日本に永住帰国)したもんで。ほんで働いているホテルの奥さんの弟の会社に入れてもらった、お願いができたから。全部その人に世話してもらったんです。古都(ホテルの名前)の奥さんね、ホテルの奥さん、ほんでその弟が社長、会社をやっている、そこへみんなを入れてもらったんです。だから、助かった。だから、ほかの人みたいに苦勞していないのですけどね、世話になっていないし、自分自身で全部、全部ね、3人に買ってやって、布団は全部。ほんで(私の)弟が引受人になってくれて、その古都のママが全部面倒を見てくれたのです。まあ、詳しく書けば書ききれないね、いろいろお世話になったこと、買ってもらったり、言葉習わせてもらったり、送り迎えしてもらったり、そんなことが山ほど。

日本に帰ってきた英子の家族は日本の親族に暖かく受け入れてもらい、親族からたくさんのお援助を受けたという。

困ったことがないだよ、それが。弟が全部面倒を見てくれて、働く口を探してくれて、その奥さんがいい人で、食べさせてくれて、それで仕事をさせて(くれて)。10何年もね、働いていたのですよ。

英子は来日後の夫の様子を、次のように語る。

おじいちゃん(夫)は働かなかったけど、家にいて、嫁とあの子(息子)が働いて、食べさせて。毎日ね、家にいて、散歩したり、やることはないけど、孫を見たり、ご飯を作ったり、家庭の仕事をしたり、よかっただとおもいますけど。私はいなかったから、家に。住み込みで働いていて。ほんで、あの、7、8前かなあ、亡くなったんですよ。中国への里帰りですよ。

それで、むこうで死んじゃったんです。里帰りにいって、親戚があったもので、2週間、1ヶ月もいなかったね、死んじゃって。

## 帰国について

子供の来日に関して、英子は日本での生活状況などを説明した上で、日本にくるかどうかを子供達自身に判断してもらったという。

だから、この3人はね、大きいあの女の子には、私は手続きをとってやらなかったです。この(下の)2人は、「帰りたけりゃ、手続きをとってあげるから」、「じゃ、帰る」と言っていたもので、手続きをとってやったのです。その後、あと何年後だったかなあ、2、3年後にその大きい娘は総領でね、新京しんきやう(現在の長春ちやうしゆん)で、夫婦とも学校の先生をやっているのに、「こっちに来たい」って。いい仕事がないし、学校の先生もできないし、日本語がわからないから、ほう、だって、あの、「好きのようにそっちにいてもいいし、こっちきてもいいし、それ苦労するから」と言っただけど、「来たい、来たい」って、ほんで来たのですよ。いまは松本市にある団地にいるけどね、工場で働いている。

英子の3人の子供は個々に来日したが、来日当初は英子が子供たちのために、日常生活用品から仕事の斡旋まで、事前の準備をしていた。いろいろな苦労があったようであるが、何とか生活ができたという。

いいですよ、家を建てて、みんな、ははは・・・孫も家を建てて。今はだめだけどね、正直に言って、帰ってきた時は良かったですよ。松本に帰ってきた、(子供)3人ともね。ほいで、私は皆に(家を)造ってやったもので、しかも、(他人からは)1銭もしてもらってない。全員もらってないですよ、援助がないです。

英子は、行政からの援助はほとんどもらえなかった。帰国後はほとんど自力で生活を営んでいた。

しかし、日本の経済が不景気になるにつれて、英子の家族も影響を受けるようになった。長男の勤めた会社が倒産してしまったため、再就職という状況に直面しなければならなかった。英子の長男はなんとか運輸会社に再就職できたが、英子は息子の新しい仕事に不安な気持ちを隠せないでいる。さらに、中国の経済発展と日本の経済衰退というコントラストは、英子に子どもたちを日本に呼び寄せたことの意義を見出しづらくさせている。そのときの心情を、英子は次のように語る。

安定・・・会社が潰れちゃって、むすこの会社が潰れて、また、あの、何か働いているみたいだけど、いまは不景気だってね、日本も。(子どもたちは日本に来ることに)後悔しているか、していないか、私もきいたことがないけど。最初はよかったってね、日本は、今だめだね。でも、みんないいじゃないですか、向こう(中国)に帰ったって、仕事がないし、私は

帰ればいいけどね、向こうで食べていかれる、ひとりで。こっちの年金から、向こうの年金（退職金）ね。だけど、あの人（長女）ないから。二女は、神奈川にいるけどね。私は正直に言って、中国にいても良かったと思う。帰ってきて後悔しているよ。だって、子供のためによくないもんね。今、会社はどんどん潰れる。（息子の）会社が潰れたの、潰れちゃった。新しい運送会社に行って、あのトラックであれ（運送の仕事を）しているけど。前に免許を取っていたからね、大きい免許（大型免許）取っていたから、よかったけど。そうじゃなきゃあね、職がなくなっちゃう。心配しているんだよ、事故があったら、困るものでね。大きな車だから、4トン。だからね、子供のためにも帰ってこなきゃ良かったなあと。むこう（中国）もよくなっているし、後悔してもだめだね、いま、一番後悔している。

この語りのなかで、英子は「後悔」という言葉を何回も繰り返した。この「後悔」という言葉に、彼女はどんな意味を込めているのであろうか。英子は自分自身の帰国については決して後悔と言っているのではないだろう。子供達が不安定な生活状態に置かれていることに対して、申し訳ないという気持ちを表したのであると思われる。つまり、母親として、子供に良い生活環境を提供することに対する責任感を感じているのである。同時に、冷たい日本社会に対する失望でもある。

### 孫の話

英子は息子の家族と一緒に生活をしている。英子の息子は1男1女、2人の子供を儲けた。長女はすでに社会人として会社で働いている。長男は日本で生まれ、現在小学校6年生である。英子は孫の教育について、次のように述べる。

中国語は大きい子はできるけど、小さい子はぜんぜんだめだね。教えても覚えなだよね、覚えたほうがいいと思うけどね。ただ、英語だけ習っているけど、英語何もならないね。でも中国語少し分かると思うけどね、中国語で話、親がしているからね。だけど、習ったほうがいいと思うはね、これから中国のほうが発展するってね、日本がだめだ。そう思いませんか？

英子の話のなかからは孫に中国語を勉強してほしい、覚えて欲しいという気持ちが表れている。つまり、一方的に日本の言語・文化を吸収するだけではなく、中国語などの知識も身に付けてほしい、将来は日本と中国のどちらでも暮らせるようになって欲しい、という見解であった。

英子は自分自身についても、日本でわずかな年金で生活するよりも、その年金をもって、中国で生活をするほうが良いと判断している。なぜそういう判断しているのかを、英子は次のように語っている。

76(歳)には、私は辞めたけど、会社。4年前に、やめて、だけど、年金が積んでいない、私

は。こっちはね、だから(年金)少ないのよ。でも、くれるだけいいけど、もらっていない人がいるよ、4万円までもらっていないが、3万8千円をもらっている。(日本に来てから)ずっと、アルバイトでしたから、(会社が年金を)積んでないから。正社員だったら、もらうけど、会社が社員として雇ってくれない、年をとっているから、ずっとアルバイトだった。(年金を)むこうでもっていて、中国で、むこうで(毎月)400元くらいもらっているね、そのくらいのお金で十分足りるでしょう。まず、家を買って。私がそう思うけど、息子たちはどう考えているのだろう。娘はむこう(中国)で家を建てたよ、2番目の娘。家を建て、退職したら、(中国に)帰る。私も帰りたいから、働いて、貯金、ずっと貯金していた。

英子は、1984年61歳で日本に帰国した。先にも述べたが、行政からの援助はほとんど受けていなかったという。やむを得ず61歳という年齢で働きに出たが、正社員として雇ってもらうことがなかなかできなかった。78歳までパートやアルバイトをしながら、生活を営んでいた。このように、英子の中国で暮したいという思いは、日本で厳しい生活状況を迫られたからであろう。

### もう一度中国で暮したい

中国で暮したいという思いをもたらした要因は生活状況だけではない。生活習慣、価値観、近隣との付き合いなどにも及んでいるようである。

やあ、中国に帰れば、自由でしょう、世間の人も。日本は決まりが多いでしょう、決まりというか、「規矩」(「規則」の中国語訳)何というのか、ここに引越してもそうだし、ああ、松本市にある団地にいるときにそんなことがなかった。今は、何か、あそこは中国の人だとか、言われるでしょう。礼儀が違うだね、礼儀がこう違うだね。ほら、いろいろ礼儀があるから、それに合わせてかないといけないもんで。うちの嫁達がぜんぜんだめだから、主に私が出て、あれ(近所との付き合い)をするけどね。礼儀、もっとも、何でも、若い人じゃ、無理だと思います。子供が大きくなればね、日本語がべらべらで何でも書けるようになれば、いいと思うけど。中国(で)何というのか、礼儀・・・分らないね。決まっていること、あいさつするとかね、寒いときやあ、寒い挨拶するとかね、その礼儀さ知らないから、多分そういうことが(ない)と思うけどね。だから、中国だったら、ほら、自由でしょう、ね。行き会っても、喋っても、喋らなくてもね、通り抜けたら、そのまま。だって、子供の参観日、孫の参観日、私きり、先生と話ができないでしょう。息子、いいけど、ちょっと無理。働くばかり、勉強しないから、中国語きり喋るから、日本語を覚えるのは、少ないのよ。だから、むこうに居れば、さあ、楽だと思うけどね。

あの人(嫁)が帰りたくない、(息子は)帰りがっているからね。やはり、むこうで家を建てて、そういう風にやりたいかなあと思って。難しいのは、それも日本は、人間と人間の付き合いね、難しいから。だから、もう引越して2年になるけど、そのまわりの人と喋ったことがないから。



英子は中国に居たときの中国人との付き合いと現在の近隣関係を比較しながら、次のように語る。

そうだね、むこう（中国）のほうは、付き合いやすい。まず、みんな一家のように喋って、よかったね。こっちは難しい、若い人きりだし、この辺は。都会の方はいいかもしれないから、松本だめだね。寒いし、雪が多いし、田舎だし、頭も田舎だってね、余計そういうことがあるんです。町だったらいいもんね、都会だったら。本当、都会だったらいいですよ。家の娘たちのとこ（神奈川県）、何ともないの、そういうことがぜんぜんないの。だから、田舎だめ。松本に居たって、そう。長野県はね、だって、田舎で頭が遅れているから。だから、そういうところがだめなのだよ。後悔してもだめだね、今。帰っても都会に居ればよかったけど、田舎にきて。〈筆者：都会というのは東京、大阪ですか？〉そう、<sup>よこはま</sup>横浜とかね、ああいうとこだったらいいですよ。あっち、こっちみんなそこら中（から）きているから、頭は回転がいいだよ。田舎というのは、まあ、昔からの頭だから。

子供が帰らないと思うけどね、ね。今の子供は、大きい子はもう帰りたくないみたいだけど、小さい子も帰りたくないけど。まあ、嫁は帰りたくないわ。2人きりだから、逆なの。だからね、苦しい思いしなかったから、友達とか、親戚とかね、みんなよくしてくれたもので、こっちでもよくしてやらなきゃいけないから、人と付き合いですよ。付き合いよければ、どこへ行ってもいいけど。この辺でも、年寄り居りゃあいいけど、年寄り一人も居ない。みんなの子供が小さくて、若い人きりだから、私にあわないの、だから、居たくないの。これが、他のほうね、年寄り多いところ、一緒に温泉に行くとかね、話し合い（ができればいいけど）、（年寄りが）居ないもん。東京からきたり、青森からきたり、みんなそのほうからきている。

## 現在の生活ぶり

英子の現在の生活ぶりは、毎日の部屋の掃除、階段の掃除からトイレの掃除、ご飯の仕たくなどである。英子は一生を働いているから、寝ていられないという。しかし、英子にインタビューする1ヶ月ほど前に、腕に怪我けがをして、何回か入院したという。その経緯を、英子は次のように語った。

今月の13日行って、15日出て、先月の23日に入院して、25日、先月は、ね。今月3日、先月も3日、ほんで、去年の6月が1ヶ月だけど、（これで）3回目の入院したの。

〈筆者：よくなりましたか？〉よくなったけど。この手がね、もう1週間以上になった、10日にもなるね。ここ（腕）に怪我しているし、ここから入れたから、ここに傷があるしね、2週間だめだという、まだ、3、4日ばかりかね。27日によくなるって、というね。

それ、皆に餃子を作ったり、おやきを作ったり、教えてやっている、近所の人達に。ここ（自宅）にきて習うの、「美味しい、美味しい」って食べてくれたもので、好きなんだ。私の弟、

今世話になった家ね、皆にやっている、作ったり、教えたり、好きだから。中華の餃子とか、おやき、烙餅（<sup>ラオピン</sup>香辛料とみじん切りのネギなどをはさんだもの）ああいうのとか、餡餅（<sup>シエヌピン</sup>餡（具）入りのもの）って、ゴマを入れて、ああいうのを作って。皆に教えることが楽しいですよ。そういうことが好きだから、だもんで、この手がよくなれば、1日こんなとこ座ってられないものね。今日は珍しく座ってられる。動いてない（と）だめさあ。

英子は病院で手術を受けたとき、どうやら研修医に手術を任されたようである。1回の手術で治るはずの軽いけがであったのにもかかわらず、病状が悪化する一方であった。英子は自分の体を研修医の実験体として使われているのではないかという疑問をもっていた。手術が行われたときの情景を、英子は次のように回想している。

いままで、健康ですよ。このところ何ともないけど、騙されちゃうような気がするけど。私の体で研究しているじゃないかなあとって、手術するときには、先生が入って、担当の先生、あと若い人が3人ばかり。教えながら、やっているからね、研究しているじゃないかなあと。これが、失敗したんじゃない、研究して。ふうせんを入れたの、ここ（左腕の中央部）に。これが医療ミスだ。これ、いちいちやっている人を教える間がないでしょう。こうだと、こうだと、喋りながらやるもんで、こういうふうになっちゃう。えらい目にあった、（腫れが）こっちまできている。そう思っちゃいけないと思うけど、思うんですよ。何か私の体をもつて研究しているじゃないか。

## 7. 満洲、そして中国に対する思い

英子にとって、日本に帰れなかったことと、そして終戦後、中国の混乱社会を生きてきたことが一番悲しかった。軽蔑されたり、いじめられたりしたことはあまりなかったというが、恐怖と不安にかられたという。

私はあまりされないけど、友だちがね、差別され、殺された人もいるし、それこそ大変でしたよ。私は、ほら、かばってくれる人がよかったもんで、病院の先生とか、その後藤さんとか、みんなはいい人だったもんで、あれはあわなかったけど。目の前でね、いじめられたり、差別されたり、殺されたり、（そういう）人をみたことがあるけど、そういうものが辛かったですよ。ほんでその頃、日本に帰りたくても、田中角榮がいないもんで、帰れないし。ほんで、1人の友達が帰ったけど、船の中で突き落とされて、海の中で死んだみたい。そういうこともあったのですよ。だから、（そういうことは）書きたくないですよ。ね、そういうのはお互いに見ていたからね。あの、殺されるのは目の前でもってやられたりね、あれは、本当に、あれは中国人にやったのじゃないけど、ロシア人のねえ、前に先に来た兵隊がそういうことをやったのですよ。

英子は40年間中国で生活した経験について、次のように語っている。

まあ40年、いい時もあったけど、辛い時もありましたからね。食べられない時は辛いし、言葉の分からないとき、一番辛かったですよ。それで、子供が生まれて、学校、保育園も先生とは話せないしね、そういうことが一番、まあ、辛いことだったですよ。今ちょっと中国から皆きて、日本語が分からなくて、働き口が難しいと同じ。

## 自分にとって満洲とは

だから、私は言ったのは、満洲だけねえいいのに、そっちのほうもこっちのほうも、日本が悪いですよ。ね、だって、欲張りでもって、あっちのほうからこっちのほう中国全部をとろうと思うからこういうふうになるのですよ。ね、だから、私はそれが憎くて。だから、満洲って人のもので、人のもんなら、とらないのでねえ、あれをして、それだけしとっきゃ、あんなに死ぬ人もいないし、苦勞する人もいないし、中国の人も殺されないでしょう、それを、いま恨んでいるんだ、私は一番。本当そういうことはいけないよ。だから、いまの天皇陛下だって、あの人が言ったじゃないけど、下の人がやったのだから、しょうがないけど、私は、それは本当に反対だね。欲とかね、満洲だけでこのぐらい、またあっちもこっちもあっちもこっちも全部取ろうと思って、こういうことになる。

<筆者：満洲に行く時こういう状況をしていましたか？>そのときは分からなかったですよ。だけど、あとで分かったんですけどねえ。分かっていたときにもう終わりだからね。だから、悪いですよ。日本は一体、考えが違うでね。中国人だって、大勢殺されたし、死んだ人も多し、日本人ばかりじゃないでね。日本人だって、偉い人が死ななくて、皆、下の人を殺すってね、老百姓（一般の人々）。それないようにこれからもしておかないとね。今は、朝鮮とあれでやっているけど、また、危ないじゃないのね、だから、それは、あれをするじゃん、考えてもらわないと。そうですよ、そのために、みんなは苦勞して。

満洲での生活はいろんなことがあったからね、いろいろ勉強になったよ。人と人の間でねえ、思いやりがあって、貧しい家に生まれた人達は、どこの国であろうと関係なかったよ。みんな苦しいこととか、つらいこととかがあれば、いっしょに助け合ってたねえ。まあ、私は日本人として生まれたけど、あの戦争は日本が一番悪いと思っているの。戦争から生まれるのは悲しみだけなんだよ。二度と同じようなことを起こしてほしくない



## 聞き書きを終えて

今年の2月頃、私は来日当初の生活自立指導員に調査協力を得た。そして、彼の紹介により、英子さんに出会った。調査を行うにあたり2回ほど英子さんのお宅を訪ねて、2日間にわたってインタビュー調査を行った。1回目の調査は生活自立指導員に同行していただき、自己紹介を行

った上で、2人で面談を行った。最初の会話は日常の雑談からはじめ、徐々に私が関心を持つ事に話題を移して行くという方法をとった。2回目の調査を行うまでの間、何度も電話をしたり、手紙の交換をしたりして、お互いに信頼関係を築いていくように努力した。そして、1回目に調査した際に手に入れた情報を整理した上で、聞き漏れたこと、気になることをメモし、2回目の調査の際に重点的に聞いた。

調査方法に関しては、まず事前準備として、対象者の人生経験を「渡満前日本社会での生活」「満洲での生活」「敗戦後の避難生活」「中国社会での生活」「日本社会での生活」の5つの段階に区切り、これらに関してある程度の質問項目を決め、あらかじめ書き出しておいた。インタビューを行う時は、メモの質問事項に沿うように話題提供をした。語り手が話題にのってきたら、語り手に自由に語ってもらおう。語りの途中で話題を変えられたら、そのまま聞き、その話が終わってから一度もとの話を聞くという姿勢をとった。つまり、インタビューは質問事項に沿って、一問一答という形式ではないが、完全に語り手に任せて自由に語ってもらわなくてもいい。フォーマル・インタビューとインフォーマル・インタビューをミックスし、ある程度の質問事項は決めておくが、質問項目を拘らずに語り手の語りに柔軟に応じて聞き取りを進めていくという方法をとった。

英子さんは敗戦後約40年間中国で生活していて、日本人としての自己意識(ずっと日本国籍のまま中国籍に換えなかったこと、自分が日本人ということを感じなかったこと)を持っていた。しかし、彼女は農業移民として残留した多くの婦人と違って、一般的な中国人女性のような生活が出来た。彼女が日本人ということから差別、迫害を受けることはあまりなく、逆に、職場の人たちに可愛がってもらった。つまり、中国社会での生活に適応が出来ていたといえるだろう。日中国交が回復したあと1984年日本に永住帰国して19年目になる彼女が、日本に帰って来ていま後悔していることがある。それは、「中国で晩年を過ごしたい」ということである。彼女には敗戦後から中国の生活に慣れるまで様々な困難に出あったが、いじめられるようなことはあまりなかった。しかし、日本に帰国後、まわりの人達に中国人と見られ、彼女の内面世界は矛盾が生み出されていった。その矛盾を解消するため、彼女はもう一度中国で生活することを望んでいる。彼女にとって人生の半分は中国にある。すっかり馴染んできた中国の文化が日本社会への再帰の障碍となってきた。日本社会はきまりや文句が多く、中国はそのようなきまりや文句がすくない。中国での生活はのんびりすることができる、長年の中国社会での生活経験から信じているのである。(ちょう えんみん)

**※ 文中に経歴等が具体的に記されていることから、本人を特定することは比較的容易と思われるが、本人の強い意思に基づいて、本書における名前は「英子」という仮名を使用した。**

聞き取り日：2003年2月23日／2003年4月1日

執筆：2003年6月1日